

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370131

研究課題名(和文) 地図山水画史の構築 山西辺垣布陣図を手がかりとして

研究課題名(英文) Construction of history of Chinese map-landscape paintings

研究代表者

宇佐美 文理 (USAMI, Bunri)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：70232808

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：中国の山水画と地図の関係について考察を行った。とりわけ、現在までほとんど考察されることがなかった「地図山水画」(地図として描かれているが、山水画としての要素を持つもの)についてその特徴を明らかにした。一方で、京都大学所蔵の諸地図について、様々な方面から、類似品を持つ台北故宮の研究者との共同研究を進めた。

研究成果の概要(英文)：The relationship between Chinese landscape paintings and map drawing was examined. "Map with elements of landscape paintings" has not yet fully studied in previous studies. Through this project research, it is clarified that "maps with elements of landscape paintings" have several important features. A joint research with researchers in National Palace Museum in Taipei was carried to examine the old Chinese maps stored in Kyoto University, comparing the Chinese maps stored in Taiwan.

研究分野：中国哲学

キーワード：中国絵画 地図 山水画

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する背景には大きく言って二つの要素がある。

ひとつには、数年前から開始している、京都大学所蔵の「山西辺垣布陣図」の研究の蓄積をもとに、さらに同図ならびに他の京都大学蔵品の調査を進める必要があったことがある。このことは、同時に、研究代表者がそもそも地図に興味を持ったのは、同図を研究分担者の杉浦氏、同じく木津氏と共同で解析を始めるなかで、地図というものが山水画を研究する上で極めて重要だという、ごく当たり前のことであるにもかかわらず看過されてきたことに気づかされたことも大きな意味を持っている。

もう一つの背景は、上記のように、山水画研究者がほとんど地図に興味を払っていないという事実である。山水画の研究者のほとんどが美術史畑出身で、作品の「質」にどうしてもこだわるために、確かに山水画の名品と出来を比べたなら、いささか遜色があることは事実なので、研究対象としてのぼりにくいということも加わって、ほとんどの絵画図録に登場しないことはもちろん、美術館博物館の「絵画」の展覧会にも飾られることはめったにない。

そのように看過された理由は、「絵画は絵画、地図は地図」として、別物だという意識が強いから、ではないかと考えた。本研究が「地図山水画」という概念を特に提示し、その歴史を構築したいと考えた背景の大きな要因はここにある。

## 2. 研究の目的

本研究は、「山西辺垣布陣図」の研究考察をもとに、これまで中国絵画の歴史、さらには中国山水画の歴史のなかで無視されてきた、地図に描かれた山水について、それを山水画の歴史の中に位置づけることをめざした。同時に、類品および関連文献・史資料調査および陣や長城、山河などの現地比定を踏まえて、記載された文字情報、諸施設の空間配置や行程等に関し、多角的な分析を行い、本図の全貌を明らかにし、それを手がかりとすることにより、構想される地図山水画史が、ひとつの具体的な現実と地図に関する明確な理解に基づくものとなる。さらに、地図的描図形態の解明、即ち普遍的な地図類型の中で、本地図が持つ特異性と普遍性を明らかにし、地理景観の中でどのような特質が地図に反映されるかという視点から、本図に描かれる土地景観を特徴付けることによって、広く世界の地図や風景画、山水画との関係の中に、本地図を、さらには中国地図山水画を位置づけることを目指す。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者宇佐美の地図山水画史に関する個人研究と、研究分担者杉浦、木津の両名を加えた、京大蔵品の共同調査との二つの方法をとった。とりわけ後者については、台北故宮博物院の盧雪燕研究員の協力を仰ぎ、助手の方も含めて京大にお招きして共同で調査を行い、意見交換をすると共に、こちらからも台北故宮博物院に赴き、蔵品調査を行った。

## 4. 研究成果

2013年度には、京都大学蔵「山西辺垣布陣図」と関連する地図の調査研究を主に行った。とりわけ2014年1月に、この図と同様の状況下で時期を異にして作成された図を多く所蔵している台北故宮博物院図書文献処の盧雪燕研究員他二名を招いてレビューを受け京大蔵本を見ていただき、意見交換ができたことが大きな成果であった。その後、台北故宮蔵本の画像データを収集し、以後更に詳細な比較研究が可能となったことも重要な進展である。なお、上記布陣図とは別に、京都大学蔵「北京城図」の調査も開始した。

なお、研究代表者宇佐美は、個人研究としての地図山水画史の研究を進め、その中で、実景山水画の代表作であって地図山水画史を考える上で重要な作品である上海博物館蔵「西湖図」が東京国立博物館で展示され、実見調査できたことも有意義なことであった。その他、中国の書画研究誌『芸苑掇英』の図版のデータベース化、前記盧先生の「山西辺垣布陣図」に関わる中国語論文の日本語翻訳作成なども、この年度の成果である。

2014年度には、研究代表者宇佐美は、前年度に続いて地図山水画史の研究を進め、その成果の一端を岩波新書『中国絵画入門』(2014年6月刊)の第七章「地図山水」ならびに「地図か山水画か」の中に記述した。研究分担者杉浦と木津は、京都大学蔵の北京内城図の研究を進め、その成果を『京都大学文学部研究紀要』54号に「京都大学蔵『北京内城図(八旗方位図)』(仮称)に示される満洲・蒙古・漢軍の関連施設とその時代背景」として発表した。

2015年度には、研究代表者宇佐美は地図山水画史に関する研究を昨年度に引き続き行った。研究成果に関わる論文は、藤井淳編『古典解釈の東アジア的展開』(京都大学人文科学研究所(2016年度内に発行予定))に掲載する予定である。これは、地図山水画を考察していく中で、「実景山水画」を考えることの重要性があらためて認識されたことによる。これはさらに、実景に基づいて瀟湘あるいは瀟湘八景を描く場合に、しばしばそこに漁父が描かれること(それは南宋の李氏「瀟湘臥游図」(東京国立博物館蔵)やはり南宋の牧谿「漁村夕照図巻」(瀟湘八景之一、根津美

術館蔵)など、枚挙にいとまがない)の意味が問題となる。そこで、実景図に限らず、そもそもこの漁父を描く意味自体に変化があったことを、特に漁父を好んで描いた元の呉鎮の作例などを手がかりにしながら考察するものである。

また研究代表者宇佐美は2016年2月に台北故宮博物院を訪問し、書画ならびに典籍の調査をするとともに、台北故宮博物院図書文献處研究員の盧雪燕先生と今後の研究計画について検討した。なお、盧雪燕先生については、これに先だって2016年1月に助手二名とともに京都大学にお招きし、京都大学文学研究科所蔵の清代中国地図、苗蛮図二種、江戸時代に日本で模写された明代中国地図及び日本絵図などを調査、さらに天理大学附属天理図書館にて、貴重書の調査閲覧を行い、特に日本の「水族図」の、描図法について調査を行った。これらの調査には、研究分担者杉浦・木津が同行し、調査及び議論を行った。ここでは、京都大学蔵の九辺図がチベットを含む貴重な資料であること、また、日本の江戸時代に、中国の地図を模写したものが印刷され、それが中国に渡り、情報が書き加えられた状態でまた日本にもどったものがあり、地図をめぐる日中の交流史をたどれる資料など、学術上興味深いものがあることなどについて盧教授の示教を得、さらに今後の研究計画について検討した。

また、これまで進めてきた中国絵画データベース作成の一環として、『故宮書画図録』(32巻まで)のデータベース化作業を行い、当図録に記録される作品の作者や画題等による検索を可能にするデータベースを作成した。

なお、研究論文の概要については前述したが、当該論文では特に記述されない予定の、地図の成立と山水画の成立の関係に関する考察について簡単に記しておく。

中国で最古の地図とされるのは河北平山県中山国国王墓(BC310)出土の青銅板兆域図だが、ただしこれは明確に地図と言えるかどうかは議論があり、続くのが甘肅天水県の放馬灘地図(木板)で、BC250~300年のものである。これは、あきらかに「川」の図であって、山水画の源流と考えてよい。(これは、Michael Sullivanの『中国山水画の誕生』が山水画の源流に「風景」を考える発想とはいささか異なるものであることを注記しておく。)そして、川が中心であることもその要因なのだが、視点は完全に垂直としてよからう。実は先の兆域図も真上からの視点を持つ。要するに、誰でも考えればすぐにわかることなのだが、通常の絵画は基本的に水平視線あるいは俯瞰視線である。(正確にいうと、複雑な視線を持つものがあるわけだが、その場

合にも少なくとも水平視線あるいは俯瞰視線をもつ。)対して戦国の帛畫も、馬王堆の帛畫も同様に垂直視線と考えていだろうか。これは「真上から見たらこんなふうになるはず」ということである。要するに完全な「架空視点」なのである。対して通常絵画はあくまでも「こんな風に見えるだろう」という発想ではない。その意味で、実景山水画であり、地図山水とも言える重要な作品である南宋李嵩の「西湖図」が完全なる架空視点で描かれる(これについては『中国絵画入門』の中でも既に指摘した。)の持つ意味は重要である。結局、何が地図で何が山水画かという問題について、単純にこの「視線が垂直か否か」即ち「架空視線かどうか」ということが大きな意味をもつ。それが、最初期の地図を考えることにより明確になるものと思われる。なお、放馬灘からは、BC179~141とされる紙に描かれた地図も出土している。写真のみからの考察なので非常に難しいのだが、川を描いた上で、岸を崖のように描いており、既に俯瞰視がはじまっていることには注意が必要である。続くのが馬王堆の地図だが、これは「城邑図」であって、山水画ではない。ただし、街の区画は垂直視であるのに対して、建築物は水平視されており、後に一般的になる水平垂直の混合が既に見られることが注目される。つまり、先の放馬灘の紙の地図も、俯瞰視しようとしたわけではなく、「崖を横から見た」様子を示すのではないかと考えられる。それは、よく知られる山を表現した漢代の画像磚(河南省出土浙川県出土)に見られる線と同じ物なのではないか。つまり、この放馬灘の紙の地図から、画像磚の線の意味も明らかにできるのではないかと思われるのである。なお、馬王堆からもう一点出ている「地形図」のほうは、水系を描いたものである。ただしこちらには「湖」かと思われる形状で山脈が描かれる。これは、同じく馬王堆から出土した「駐軍図」の山の描き方とは随分ちがうのだが、交互に形を膨らませてその尖端に何かを表現するというところから、いずれも山の表現であろうと推測される。注意すべきは、同じ方向からの平面的な半円のつながりにしないということである。後世には、同じ方向からの山をつなげるのが一般的となり、それはそれでまた不自然なのだが、馬王堆の場合は、とにもかくにも「上から見る」のだから、九州山川図のような、どうみても横から見た山のように見えることには抵抗があったのだろう。交互に山が半円を描いて表現されるのは、そういう意識の表れであると考えられる。(なお、地図をより「地図」らしくしたのは「地図記号」である。羅洪先(1504~1564)の「廣輿図」がそのはしりで、そのことを指摘したのは、王庸『中国

地図史稿』である。ただ、「府从」のように、はっきりと凡例(図例)を示してはいないが、馬王堆の地図もある意味では「記号化」しているのではというのが Cordell

D.K. Yee『中国地図学史』の意見である。もうひとつ、縮尺(あるいは測量)の問題があるが、これらは純粋に地図の問題であり、ここでは問題にしないが、地図と山水画の違いを考えるためには重要なことなので、念のために注記しておく。) )

なおもう一点、これも Yee が指摘することだが、地図においては「目的」が大きな意味を持つことも重要である。これは有名な荊軻の逸話に既に示されているように、「軍事目的」がその最たるものであり、「政治目的」要するに「実用」ということを考えざるを得ない。実用目的で作られながらも、山水画の技法を駆使しているところに、地図山水画のひとつの特色があることは既に了解済みのことであろう。ただ、考えるにこれは、陶磁器という「芸術」の成立ときわめて似ていることが重要であることを指摘しておきたい。なお、陶磁器との決定的な違いは、「目的」と「芸術性」が結合した後、再び「目的」が分離したもの、つまりその「目的」を無視した芸術的陶磁作品は、最初に陶磁器が作られたときの目的、「ものを盛る」という役割で考えると全く役に立たない(現代陶芸「アート」を考えてみれば明白) ことには注意が必要である。山水画は政治や軍事には役に立たない。それは「実景図」ではないから、である。ただ、実景図ならすべて政治軍事に役立つかと言えばそうでもない。その意味で、前述したように、実景図の意味を考えることが重要な論点として残ることになる。この実景図については、これも Yee が指摘するように、地図においては「境界」を示すことが重要であり、これは、政治上はそれがきわめて問題となるが、「観光地図」にはそれは不要である。その意味でこれは山水画にすり寄ることになるのか。もちろん、このことは、実景図であってはじめて問題になることなのだが、実は山や川が実際に地図の中では自ずと境界を示すことになっているというのが重要なことといえよう。

要するに、地図と山水画は別個に発展し、あるとき融合した、とおそらくこれまでは考えられてきたのだが、実は地図山水のほうはずっと以前から存在していて、それが山水画に大きな影響をあたえたという構図、つまり、単純に視線の問題で考えると、垂直視線から、人間の目線への移行が、山水画を成立させる、という方向を考えるということである。(俯瞰視は、高い山に登れば可能であるが、垂直視線は飛行機にでも乗らないと不可能。ただ、前述の李嵩「西湖図」の場合は、あの絵を描

くために登ることの出来る山が現実に存在しない。) なお議論が必要であることはいうまでもないが、しばし以上のことを指摘しておきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### 〔雑誌論文〕(計2件)

宇佐美文理、形についての再考、中国思想史研究、査読なし、第35巻、2014、32-47  
田中和子・木津祐子、京都大学蔵『北京内城図(八旗方位図)』(仮称)に示される満州・蒙古・漢軍の関連施設とその時代背景、京都大学文学部研究紀要、査読なし、54巻、2015、1-28、口絵 2p

### 〔学会発表〕(計3件)

木津祐子、想像中的中国 - 日本人翻譯中国風光和景物的歴史、第7回中華文明国際研究中心工作坊“異域之眼：日本人對中国風景の想象與運用、2013.8.30、復旦大学

宇佐美文理、形についての再考、東方学会平成25年度秋季学术大会、2013.11.8、日本教育会館

Tanaka Kazuko, Three Map Series Depicting the Region along the Great Wall in Shanxi: observation and analysis, Institute of Asian and African Studies, 2014.12.9

### 〔図書〕(計6件)

宇佐美文理、岩波書店、中国絵画入門、2014、260

宇佐美文理、創文社、中国藝術理論史研究、2015、308

宇佐美文理、青木孝夫共編、芸術理論古典文献アンソロジー東洋編、京都造形大学東北芸術工科大学出版局藝術学舎、2015、308

京都大学大学院文学研究科地理学専修(編)(田中和子、同書には表記なし)、丸善出版、京都大学大学院文学研究科地理学教室収集古地図目録、2016、288

飯尾由肯子、西出桐子、柏木知子、奥山素子、細里わか奈、森藤光宣、松岡正剛、宇佐美文理、荒井経、兵庫県立美術館、鉄斎美術館、朝日新聞社、生誕一八〇年記念富岡鉄斎一近代への架け橋一展図録、2016、295 (宇佐美 14-17)

藤井淳編(宇佐美文理)、京都大学人文科学研究所、古典解釈の東アジア的展開、2017(予定)、ページ数未定

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

宇佐美文理 (USAMI, Bunri)  
京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：70232808

### (2)研究分担者

杉浦(田中)和子 (SUGIURA(TANAKA), Kazuko)  
京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：50155115

### (3)研究分担者

木津祐子 (KIZU, Yuko)  
京都大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：90242990